

「Over the “Friend”」

世界最古の木造建造物として知られる法隆寺は、昔の人の知識と技術、感性を今に伝える最高傑作です。法隆寺棟梁の宮大工・西岡常一(1908-1995)を大学生の時に知り、映像や本から学んだことは「何かを成し遂げる」ことの大切さです。五重塔が1300年以上も地震で倒壊しないのは、木の特性とか、古代の大工の知恵とか、それが口伝で受け継がれてきた技術だということだから信じられません。でも確かなことは、人間は古代から集団や個人として人付き合いをしながら暮らしてきたということです。こうして後世に受け継いできたからこそ、法隆寺は今日も修学旅行生の前で、堂々とした姿で佇んでいるのです。

「宮大工は何てやりがいのある仕事なんだ！人生かける価値がある！」そう思ったのもつかの間、僕には弟子入りする度胸も、暮らせる自信もありませんでした。それでも「ものづくり」や「新しいことをクリエイトする」性分で、ギターを弾いたり、機械いじりをしたり、文章を書いたりしていますが、今まで一度も納得できたことはありません。その原因はわかっています。自分は「覚悟」が足りないのです。

現在の情報化社会を、覚悟を持って生きることは、ごく一部の人にだけ許された特権だと思います。僕の子供の頃からのヒーローである山下清(先生)も、絵の才能があるだけでは暮らせないかもしれない。破滅的な人生に中二病的な魅力を感じる太宰治も、文才があるだけでは、自立した女性が多い現代では誰も面倒を見てくれないかもしれません。インターネットが普及した現代では、SNS等で色々な情報が入ってきます。だから、プロよりも上手い素人ギタリストがいることや、広告収入で稼ぐ文才あるブロガーが世の中には存在することを多くの人が知っています。こうなると、覚悟を持って何かに人生をかけることは生きづらく険しい道のりだと思われれます。どんなに努力をしても上には上がいることを知り、そんな状況でも実際に何かを成し遂げないと評価されないのですから。

こういうことを考えているときは、ある本のタイトルを思い出します。スペインの哲学者オルテガが著した「大衆の反逆」です。本の内容は覚えてませんが、タイトルが僕のような大衆側の人間には、勇気が湧いてくる言葉なのです。

人より優れた才能や能力がなくなると、大衆は大衆らしく何かを成し遂げよう。興味があることは仕事にならなくても続けよう。自分に正直に暮らそう。このような意思で大衆が暮らすには、共感できる仲間、つまりは友人が必要です。

僕にとって、後にも先にも人生最高の友人は弟であり、これまで同じような人生を共に過ごしてきました。社会がどうだ？誰がどうした？そんな世の中で暮らし

ていても、僕ら兄弟は、お互いが共感できる絶対的な居場所があるのです。こういう居場所、つまりは友人がいることは人生を生きるうえで重要だと思います。

実は番組に出演した竹田大祐さんは、弟と年齢も誕生日も同じです。(もちろん見た目は違いますw)山形に移住して、こういう人と友達になるのは偶然としか言いようがありません。

「持つべきものは友」。本当にそう思います。引越しをすとなれば、車を借りて手伝いに。ライブをすとなれば、仲間を誘って観に。竹田家の唐揚げが食べたいといえば、母親に習って作り。秋だから栗ご飯が食べたいと言えば、会社の休み時間に熊に怯えながら栗拾いをするような友人です。そんな友人が、もう一人の出演者の赤井さんとマラソン仲間で、人付き合いを大切にしているメンバーだからこそ、急に声をかけてもラジオに出演してくれました。これは、僕にとって人付き合いの良さを感じた出来事でした。

僕自身、移住をして変わったことは人付き合いが出来たようになったことです。それまでは弟だけが心の拠り所で、弟もそうでした。何でも一人で出来るわけではなく、人付き合いがあるからこそ、思いやりや、友人の大切さを学ぶことができます。

人生において自分のために誰かがいてくれることは、それだけで幸せなことです。

弟にも自分以外の友人ができて、気に入った人でも見つけて、好きな人と結婚して、家庭を持って暮らすことが幸せだと思える時があるなら、僕しかいない友人だけの世界から抜け出して、いい人付き合いができるんじゃないか？そうすれば、僕は唯一無二の友人という存在を超えた気がして、自分のことのように人生が報われた気がするのです。

2021年10月10日 塗貴旭

